

文藝的グリンプス
舟橋聖一 新潮社

文藝的グリップス
舟橋聖一 新潮社

文藝的グリンプス



昭和四十二年四月二十五日 印刷
昭和四十二年四月三十日 発行

定価 四八〇円

著 者 舟 橋 聖 一

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社

東京都 新宿区 矢来町 七一
電話 東京 (222) 大代表 一一二一
振替 東京 八〇八番

文藝的グリンプス

1

昭和三十五年八月

今年の夏は、泳いでばかりいた。逗子の海岸、油壺の海、箱根富士屋のプールなど。それも大ていは、孫共とだ。年と共に、この傾向が出た。しかし、書いたものは、大ぜいの目に触れ、大衆の心の友達になれるのだから、いくら一人の生活でも、出家遁世とは、わけが違ふ。泳ぐといつても、人のいない沖合遠く泳ぎ出るわけではない。逗子のような遠浅の海岸で、バチャバチャやる程度だから、先ず生命の危険はない。

私は遊び仲間というものが好きでない。若い頃から、同人雑誌もずい分やつてきたが、みな真面目なつき合いである。私が酒もゴルフもやらないのは、酒やゴルフから生じる呑み仲間、ゴルフ仲間との交際が面倒くさく思われるからである。

なぜ遊び仲間がきらいかというと、遊び仲間には、餓鬼大将というものが、必ずいる。これが私は臍に落ちないのである。どういうわけで、彼が餓鬼大将なのかわからない。またどうい

うわけで、みんなが餓鬼大将の云うなりに服従しなければならぬのかも、わからない。

声が大きいか、柄がrippだとか、力があるとか、若しくは強情だとかいうナンセンスな理由で、彼はいつとはなしに餓鬼大将たることを、自然承認される。たとえば、麻雀をやるにしても、彼が、

「やろう」

と云えば、やることになり、

「よそう」

と云えば、よすことになる。これが腑におちない。

一人で海で泳いでいれば、誰からも支配を受けないし、また自分が他を支配することもない。

私は子供の頃、よく海へ連れてゆかれたのは、身体がひ弱かったせいであるが、泳ぎをおぼえたのは、静岡県興津で、禪宗の清見寺のある所謂清見潟の海であった。中学の先輩がいて、いきなり自由型を教わった。当時はまだ自由型は、ほんの走りだったろう。

*
*
*

箱根から、長尾峠を越して、河口湖まで来る途中、アメリカの兵隊を満載した軍用トラックに何台もあった。殊に御殿場から山中湖までの道路が滅茶々々なのはこの軍用トラックの重量のせいである。これでは、国土は破損し放題だ。

故国をあとにして、はるばる異国へ動員されているアメリカ兵の顔には、哀愁がうかんでいるが、さなきだに、貧しい日本の道路を、かたっぱし、破壊して歩く彼らの無神経には、腹が立つ。もういい加減にしろと云いたい。

* * *

「バルタイ」では、平野謙氏と私との意見が一致した。平野氏はそれに対して、「自分などに共感されては、舟橋さんは迷惑かもしれぬが……」

と遠慮していられるが、誰とでも一つの作品の鑑賞が、ピタリと合うのは、愉快なことである。然しだからといって、この次の芥川賞では、また君と反対のサイドに立つかも知れない。平野君よ。要するに、是々非々といきましょう。

* * *

われわれはなぜ、生れおちるなり、小説家ではないことを、百も承知していながら、恰も生れ落ちたときから、芸術家であるように錯覚したり、またそのように気取ったりしているのだろう。

女形が女形であるように絶えず努力することによって、女形を維持するのと同様に、作家も怠けたり、ほかのことに手を出したりすれば、すぐ剝げ落ちる。

2

昭和三十五年九月

今年は暑い夏だった。九月にはいっても、まだ暑い。いくら好きな相撲でも、この秋場所は毎日通うのが苦痛だった。それで四日ほど休んだのは暑さのせいか、それとも年のせいかな。

場所も暑いが、道中の混雑もたまらない。目白から蔵前まで、四十分から五十分かかることもある。コースを研究して、厩橋を渡って、一度川向うへ出てから、蔵前橋へ逆転してみたり、新大橋や両国橋を経由してみたりするが、五十歩百歩である。

車の中でラジオを聴いていて、次の取組の間に、場所へ飛びこむというやり方をやっているが、こんなに交通量が多くては、相撲見物も、一ト苦勞である。然し次の取組が好一番だったりとすると、私の足は駆け足になる。五十年も見ていても、まだ見たいのか。おかしい心理である。

*
* *

いくら忙しくても古い友達が、重い病氣になっているのを、つい知らずにいるのは、情けない気がする。友達の情報をもっと気にしなければいけないとおもう。今や阿部や河上（徹）は、大丈夫だろうか。

われわれはまだ、みんな働かされている。ゆっくり逢う機会などは全くない。しかし、あと五年もして、六十代になったら、その頃は少しは暇になるだろう。そうしたら旧交をあたため、老後の友情を楽しみたいものである。

*
*
*

去年は豊田三郎をあの世へ旅立たせた。今年も、ドイツ文学の恩師である小牧健夫氏（七月五日）

「雪夫人絵図」をカラーでもう一度撮りたいからと約束していた滝村和男プロデューサー（八月九日）

熱海の疎開先で、一緒の宿にいたことのある村間の新橋喜兵衛（八月三十一日）

犬養健（八月二十八日）

常磐津文字翁（八月六日）

新橋芸者千代（七月三十一日）

などが物故した。

この中には、生憎仕事とぶつかっていて、お通夜にも行けなかった人もある。

全学連書記長の北小路君が、法廷であれば、門馬裁判長に対して、

「何云ってやアがるんだ」

と罵倒した報道が伝えられた。これは、新憲法下に、軍事同盟を策謀した自民党政権は、あきらかに法律違反であり、法律の番人たる学生は、逆に政府役人を逮捕しようというほどの熱意に炎える北小路なら、その位の啖呵は、当然切るだろうと思つて、些か痛快味をおぼえた。

つまりそれほど、裁判所や検察庁の空気は、重苦しくて、事大主義的で、天皇制時代の残臭が強いのである。

私は刑事事件に問われたことはないが、民事では二度ほど、被告の座にすわらされた。私は二度とも、えんえんとして、二時間近く、自分の云いたいことをすべて吐露し、検事及び裁判官をして、悉く傾聴せしめたから、あと味はわるくなかったが、最初、氏名などを呼び捨てにされたときは、ムカついた。せめて、何々君と、君付けにしてもらいたかった。

大体、法律は峻厳なものだとしても、それを司る司法官までが、われわれより偉いというのはおかしい。その法律だつて、ずい分いい加減に成立してしまふ。田舎代議士の突拍子もないのが大ぜいいる国会で成立させるのだから、消毒不完全の病院で手術する位の危険率をもっている。たまたま無教養な田舎代議士のテーブル・スピーチなどを聞く機会をもつと、彼らの勉強や知識は、都会のミーちゃんハーちゃん以下だと思ふことがよくある。頭のわるいそれらの

多数決で決まった法律では、民意の完全な表現とは思われない。

然し、それは今、不問にして、日本は法治国家なのだから、法律は神聖にして最も公正なりとしたにしても、それを扱う司法官までが、うぬぼれて威張り散らすことはないではないか。然るに、司法の世界では、司法官はたしかに人民の上にある。

それは長い伝統を断ち切れない「召使の裁判」であるからだろう。そのために必要以上に威張って見せている。泥棒や強盗に対しては、それでもいいかもしれないが、未決にいる国事犯の場合など、昔にくらべると、むろん大いに民主化されたとは云う条、まだまだ司法官のナセンスな高姿勢は腹にこたえるに違いない。なぜ北小路に喋りたいだけ喋らせてみないのだろうか。何故発言を禁止するのだろうか。もつとも、全学連の中にも、そろそろスタンドプレーだけを目的にした亜流があらわれて、鬼面人を驚かすのもあるから、そういう手合には注意を要するが。

北小路が暴言を吐いたことだけを取上げずに、北小路をして、暴言を吐かした司法官の認識不足や思い上りに対しても、反省を促すべきであらう。

*
*
*

私も戦争中だが、舎弟が治安維持法にひっかかったとき、その判決日には、出廷して、裁判長の判決文朗読を聴いたものだ。そのとき、いとも厳かに、
「小説家である兄聖一の自由主義的影響により……云々」

と云われたのには驚いた。私の影響で、舎弟が赤くなったという滑稽で乱暴な推理である。このときは、私も北小路ではないが、

「何云ってやアがるンだ」

と、叫びたくて、ウズウズした。当時の警視庁特高が考えた通りを、裁判官はその判決文の中に織りまぜたのであろう。兄弟が影響し合うことは、声や顔だけで、性格とか思想とかまでが似ることは、ごく稀れである。弟はあくまで弟の道を進んだ。それは戦後に証明された。要するに、特高らしい下司の勘ぐりにすぎなかったのである。

* *
* *

この間、箱根の湖尻から、大涌谷を越して早雲山へくだる世界第二とやら売りこみのロープウェイに乗って、齒の根が合わなくなった。

人にはいろんな苦手があるもので、大体私は、高いところへのぼるのは苦手である。高層ビルの屋上なども、金アミがはってないと、足がすくむ。あのロープウェイが出来たとき、心ひそかに絶対に乗るまいと独りぎめしていたのに、

「何ンでもないから、乗れ乗れ」

とすすめられ、乗らないと、いかにも卑怯者のように云うので、我慢して乗ってみたが、動き出した途端に、下りたくなってしまう。小さい檻のようなものへ入れられていることも、苦々しかった。一時的な拘禁性ショックかもしれない。

全行程三十五分。じつにノロノロと走る。それなのに女車掌もいない。これでもう少しスピードがあつたら、まだ不安がまぎれるのではないか。

私は、すべてに瘦我慢はしないのを生活信条としてきた男だが、この三十五分の苦痛を味わったのは、乗れ乗れとすすめられ、男でないと云われるのがつらさに、瘦我慢して乗ったのが、原因である。はからずもわが信条を破ったせいである。とすれば私にとって、このケーブル乗りは、

「瘦我慢はやはりナンセンスだ」

という生きた証明であつた。箱の中にいたケーブル保線の工夫が、この間、ここらで二時間ほどストップしたという話をしていた。この話も、私の肝を縮み上らした。

しかし、早雲山駅に下りた瞬間に、胃のモヤモヤと貧血感はおさまった。地上に於ける私は、忽ち元氣旺盛に復したが。

ものは試した。運賃は二百円だから、みなさんも箱根へ行ったら乗って見給え。恐らくは私の臆病と異常感覚とを、話題にして、大笑することが出来るだろう。

昭和三十五年十月

秋晴れの一日。余暇を得て、京都の郊外をバスに乗って、歩き廻った。妙心寺、仁和寺、大覚寺、天竜寺などをすぎ、鳴滝の音戸山へのぼった。そこで小憩して、松茸を取り、すき焼にして、山で食べたのは、うまかった。ここからは、愛宕山、小倉山などもよく見え、すぐ下には広沢の池がある。また明智光秀が、突如叛旗を翻して、本能寺へ踵を返したと云う老の坂も望まれる。本来なら亀山から備中へ出るには、三草越をしなければならぬのが、光秀は逆に老の坂を左へ下って、桂川を渡河したのである。

今書いている「お市御寮人」は、光秀のことも調べなければならぬので、大分参考になったが、恐らくもう一度来なければならないだろう。

バスは渡月橋を渡って、松尾神社までゆき、松尾橋を渡って、一転した。そこから、梅津を経て、四条大宮へ戻ってくるコースだ。バスで廻ると地の理がわかっていい。それに、何んと云っても、まだ京都は車の洪水をまぬがれていて、細い道でも、立往生しないですむ。

車と云えば、私をはじめ菊池寛先生から、三十七年式の幌型ダットサンの中古車を、それも、「田之助紅」映画化の原作料として貰ったとき、文壇の評判はあまり芳しいものではなかった。

この車は大映社長たる菊池氏の車だから、籍は大映にあった。私は当時専務理事の永田雅一氏に呼ばれ、

「君は、ダットサンがいいか、現金がいいか……こちらはどっちでもいいんだ」と訊かれたので、

「僕もどっちだっていい」

と云うと、それじゃダットサンにしろときまつたのである。

それなのに、作家のくせに車など持つのは怪しからんという古い観念がまだ残存していたのだろう。

しかもそのダットサンたるや、所謂ボンコツで、何遍クラッチをこわし、ミッションを碎き、道の途中でエンコしたとかわからない。

今では、作家どころか、学生までが、車を持ち、東京中が車でうずまり、そのために、電車のほうがずっと早いと云う奇現象を呈している。

その頃、自動車のことと、とやかく云った人の名前は一々おぼえていないが、云ったほうで

も、もう忘れているだろう。散々叱言を云った御当人が、高級車を乗廻している人もあるだろう。要するに文壇ばかりでなく、どこにでも、すぐ人のことをとやかく、云う奴はいるものらしい。

然し皮肉なことには、東京で車の洪水に苦しんだ私が京都へ来て、バスに乗って救われたのであるから、おたがいに、口は慎しむほうがよさそうだ。

*
*
*

週刊紙「タイム」の十月二十四日号を読んでいたら、浅沼さんが、山口二矢に暗殺される一瞬の写真(毎日)が載っていた。「By the Sword」という小見出しの下に、当日の経過が報道されていたが、その中で、

「浅沼は、皮肉にも自分自身が暴力の雰囲気を作り出したことの大責任者である。レッド・チャイナを讚美し、アメリカを、中共と日本の共通の敵として叫びつづけることに飽きなかった民衆煽動家浅沼こそは、かの蛇の如く踊り狂う所謂スネーク・ダンシング・デモンストレーションを組織して、過ぎし七月、日本からアイゼンハワーをしめ出した張本人である。また前首相信介・岸や、ソシアリスト丈太郎・河上が二人共、ファナチックな連中によって刺されたのも、もとはと云えば、浅沼だ」

と云った論調で紹介しているのが、目につく。これはどうも怪しからん。

然し日本の新聞には、こうした論旨のものは、殆んど一つもなかったのではないか。「タイ